

年刊現代詩集

'82 上半期



芸風書院

年刊現代詩集 '82 (上)

1982年 7月20日 発行

¥ 3,000

編 者 年刊現代詩集編集委員会

発行者 萩 原 勉 夫

発行所 ㈱ 芸 風 書 院 内

年刊現代詩集編集委員会

東京都文京区本郷 1-15-4 文京尚学ビル

電 話 (03) 814 - 9591 (代)

振 替 東 京 0 - 4 7 8 4 1

表紙デザイン・倉持正 レイアウト・伊奈克平 印刷・㈱上野印刷所

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

年刊現代詩集'82(上)

—全國主要詩誌代表詩人集—

芸 風 書 院

年刊現代詩集新人賞

受賞作品及び受賞者

第一回新人賞

入選 「人魚」(年刊77所載)

山本美代子

神戸市。「日本詩人クラブ」「地球」「たうろす」所属。

「河太郎文」(年刊78所載)

廣岡昌子

交野市。「大阪現代詩人会」「交野詩話会」所属。

佳作

「嘔吐」(年刊77所載)

小松弘愛

高知市。「日本詩人クラブ」「兆」所属。

「風」(年刊78所載)

木下幸江

西宮市。

「ゼロの季節」(年刊77所載)

高橋和子

神奈川県山北町。「作家社」所属。

第二回新人賞

入選 「女犯不動」(年刊80上半期所載)

打田早苗

山形市。「東北詩人」所属。

「噂の耳」(年刊80上半期所載)

鈴木豊志夫

千葉市。「千葉現代詩人会」「光芒」所属。

「月と魚と女たち」(年刊79所載)

中野博子

大阪府。文芸誌「作家」所属。

佳作 「鳥」

(年刊80上半期所載)

小松弘愛

高知市。「日本詩人クラブ」「兆」所属。

「ひがん花幻想」(年刊79所載)

鈴木操

前橋市。「芸象文学会」所属。

「不良志願」(年刊80上半期所載)

掛布知伸

名古屋市。「市民詩集の会」所属。

「私の夏は」(年刊79所載)

たかとう匡子

神戸市。「大阪現代詩人会」「第三紀層」「むとす」所属。

第三回 新人賞

入選 「詩人偽証」(年刊81下半期所載)

そらやまたろう

宇都宮市。「栃木県詩人協会」「橋」所属。

「蜘蛛の糸」(年刊81下半期所載)

横さわ子

福島市。「地球」「あぶくま詩の会」「北斗の会」所属。

佳作 「裏町どしらそふぁみれど」(年刊81上半期所載)

掛布知伸

名古屋市。「市民詩集の会」所属。

「水域から」(年刊81上半期所載)

岩佐なを

横浜市。「地球」「射撃祭」所属。

「アクリル」(年刊81上半期所載)

紫圭子

愛知県鳳来町。「孔雀船」「原始林」所属。

「ほたる火」(年刊81上半期所載)

原桐子

常陸太田市。「日本詩人クラブ」「白亜紀」

「翼」所属。

「沈黙」(年刊81下半期所載)

若林光江

栃木県南河内町。「日本詩人クラブ」所属。

年刊現代詩集

'82

(上)

目次

野辺で
石火
青空
樹氷
古園
初冬の午後
歪んだ壺
枯葉
パジャマが窓を着ている朝
いのち
阿賀川
会津盆地
追悼
宝石
飛行論
寒菊の唄
湖

安芸 信広…12
阿木 龍一…13
阿部富美子…14
阿部 栄子…15
藍川 児郎…16
青木 出郎…16
青山 隆弘…17
秋 太郎…19
秋元 炯…20
秋山 末雄…21
天野 行雄…22
新井 均二…24
新井 豊吉…24
荒木 義雄…26
綾部 健二…26
安藤 雅郎…29
安保 賢一…30

彷徨

あの女に贈る詩

夕べの家族

節

霧雨の朝

白いシャツの子等

鏡の中の四季

遠景になっていく子ら

隅田川新川通

死んでしまったんですね叔父さん

高千穂

陸上

れじいな・ふくの歌

「詩」に関するいくつかの覚書(抄)

他人

リンゴの歌

あなたの前で

核の廃絶を

春の陽射し

サンコ夫婦は息子と別れた

伊藤 勲…31

伊藤 清…32

伊藤 貞彦…34

伊藤眞理子…36

飯島 右子…37

石川三恵子…38

石村 柳三…39

泉野 作雄…40

稲垣 真藻…42

井上かつこ…43

井ノ口永介…43

岩 太郎…44

岩崎 直哉…45

岩見 百丈…47

宇田川本子…48

上田 蔵六…49

上田 良江…49

上野 袖子…50

牛島美千代…52

えぬ・まさたか…53

愛のかたち 二章

皴

新たな旅立ち

河川

空の岸辺で

弟

モノローグ

嵯峨野路で

りんご

雄飛

宴

独り

出勤時

さつまいもの話

甲冑師鐔

昭和五十七年一月二日二十三時・宣言

苦い酒へ捧ぐレクイエム（鎮魂歌）

葛藤

行き暮れて

運命

榎本 了…54

速藤 富子…55

おおらと男…56

緒方喜久子…57

尾駁安次郎…58

小沢 恵子…59

小柳 俊郎…60

大池 満…61

大賀 富子…61

大木てるよ…62

大久保友博…63

大路今日子…63

大重 辰雄…64

大竹 尹…65

大谷 從二…66

大橋三千代…67

大広 行雄…68

大西 一史…69

大貫 喜也…70

大道 照代…71

こんちワ Parodie

時限

コーヒーの香りの彼方から

日記

風

お伽噺

鷺をわたす

ざまあみやがれ

のたうつもの

都会のほとり

夢の裂けめ

象使い

生家

モーターバイク

雲の日

受胎告知

裸の木は今

冬の詩

雨の群集

火彈

鳳 真治…72

岡田 実…73

岡部 晋一…74

岡本美代子…75

岡本 守三…77

奥 重機…78

香山 雅代…79

掛布 知伸…80

笠原 昇…81

笠間 茂夫…82

片岡 虎二…83

桂木 良…84

金沢 星子…85

金井 建一…86

金谷 八郎…87

金子 孝子…88

上谷 澄子…89

紙谷美智子…90

亀井 義雄…91

川井 照司…92

漂流者 その二
 部屋
 雉の詩
 太陽は死人の脳髓のように
 多摩川
 受胎告知
 どこかに
 故郷
 焰心
 石焼芋
 冬の海
 離れて尚も我析る
 故郷がなくなる (三)
 出社
 青蛇
 埃が射る
 うた
 金魚
 菖蒲
 樹氷祭

川野 高男… 93
 川本 洋子… 94
 川村 敏男… 95
 川村 洋一… 96
 河井 博信… 96
 河上 鴨… 98
 河野 恵子… 99
 神崎 崇… 100
 木田 直江… 101
 木津 武雄… 102
 菊池 有記… 103
 如月 一人… 104
 北浦 勇海… 105
 北多浦 敏… 107
 北原 政吉… 107
 岸本 康弘… 108
 清岳 こう… 110
 くすみじゅん子… 111
 国兼由美子… 112
 倉橋 良子… 112
 海峡を見つめる女
 夜の目
 悪魔の哄笑
 間奏曲
 廻転燈籠
 大庭鉄太郎先生のこと
 慕情
 闇の中で
 鶴渡る
 夢路
 飼育
 昔ばなし
 公園に来て
 弁当
 これが靴だといっても
 ふゆ
 気ニナル造型
 一・八才の孫と
 形象
 Mの悲劇？

車木 蓉子… 113
 黒川由記子… 115
 黒木 松男… 116
 黒羽 英二… 117
 桑平トキ子… 118
 小池 幸子… 119
 小杉 明子… 121
 小菅 敏夫… 122
 小林かずお… 124
 小松 流螢… 125
 小松 弘愛… 126
 小村 恵子… 127
 小山 透… 128
 後藤 英実… 129
 合田 曠… 129
 今 紀子… 130
 近藤 實… 131
 近藤 緑星… 132
 佐伯 犯生… 133
 佐々木直樹… 134

ダイヤモンド
 足
 プロメテウス
 麦畑の彼方
 窓から
 欠如シテイル無
 サンクチュアリⅡ聖域
 原始と原子
 扉
 虜囚のうたⅦ
 デジタル時計
 失楽の歌
 道化の詩
 流れる
 白い花
 老鴉賦
 秋の情景
 黄金山に鴉が飛ぶ
 捜しものがわからない
 冬の木

佐藤 愛子…135
 佐藤 巖…135
 佐藤 芳子…136
 斎藤 正敏…139
 斎藤 征義…140
 阪上新治郎…141
 坂本 登美…141
 酒井 京子…144
 桜庭恵美子…144
 澤 龍二…145
 沢井 陽子…147
 山家 樹風…148
 寒川 靖子…149
 しだかつみ…150
 島 木綿子…150
 嶋岡勇二郎…151
 庄司のり子…154
 函師 照幸…155
 洲浜 昌三…156
 杉原 真音…157

馬
 湖底
 眠れ眠れ
 都会の冬
 同志
 だるらん
 雨
 足もとで「自由」が
 落ちたカバンの歌
 氷河期
 鬼籬
 麓の村
 雨上がり
 二重人格
 ミー太郎
 夜明け
 蘭
 虹の雫
 生きる
 人間は生きながらえて

鈴木 泰賢…158
 鈴木 太郎…158
 鈴木豊志夫…159
 鈴木 理子…162
 先崎 文枝…163
 そらやまたろう…165
 空 豊彦…166
 たかとう匡子…167
 たなかけんじ…168
 たけおかのりお…169
 太附 義和…170
 田崎 芳作…171
 田中 保…172
 田中 理助…173
 田村 旭…174
 平 巧子…175
 鷹取美保子…176
 高橋 和子…177
 高橋 國雄…177
 高橋 保雄…178

木枯しの季節
 冬の朝
 砂時計
 夢
 北は荒れているか
 焦燥
 二月の空に
 少女の描くもの
 ギターをかきならしているか
 義眼
 青いネクタイのいらなくなった朝
 ゆめ 二題
 闇
 天窓
 不信の系譜
 狂気について
 風景
 風車
 雨の中の蝶のように
 教師の涙

高群 博子…179
 高山 悦子…179
 篁 幸子…180
 竹原 政子…181
 武政 博…182
 塚本 静子…183
 司 真…183
 戸張みち子…184
 土井 和子…185
 得居 俊子…186
 富田 正一…187
 鳥居三千秋…187
 鳥海 哲子…188
 奈比 浩美…189
 奈良 勇…191
 名古屋哲夫…192
 中上 学…193
 中野 忠和…194
 中野 博子…195
 永井 君子…195

朝の眺望
 戦火の後に
 嵯峨野だより
 雪が来て姉は流れて行く
 アカシヤの木
 朝の光りの中へ
 くらしのなかに
 存在する霊念
 子安地藏
 夢話
 憤
 保護帽と金盞花
 玉手箱の幻想
 松本で君と
 善について
 真我
 マリモ
 追憶の環
 星と地球
 地軸に近く

永井 正春…196
 根岸 保…197
 根来真知子…198
 野間亜太子…199
 野村 道子…200
 芳賀 式部…201
 長谷部俊一郎…202
 初谷曙美永命…202
 浜本 一穂…203
 早川 琢…204
 晴野 詩子…205
 半澤 昇…206
 日置百合子…207
 肥後 敏雄…207
 飛弾野三保子…208
 廣岡 昌子…209
 廣瀬 幸子…210
 広瀬志津雄…211
 府内 一夫…212
 福谷 昭二…212

仮死
 大晦日
 アルマジロのように
 普通の人
 三瞬
 鳥渡る
 飛翔
 津軽に住んで
 女友達
 夢幻
 生命をかけて
 女人
 濁点付き
 アメリカ論
 ゆがんだ魚
 運河XIX
 行き迷う
 鴉
 ポンペイの秋
 売れ残り

福永 一子…214
 藤 外美子…215
 藤岡 正幸…215
 藤本 孝子…216
 二見 雄典…217
 船木魚太郎…218
 穂刈 栄一…218
 本城 京果…219
 榎 さわ子…220
 牧野知鶴子…221
 町田 久…221
 松下のりを…223
 松永みやお…224
 松本 一哉…224
 丸地 守…226
 丸山 勝久…227
 三浦 由喜…228
 三田 忠夫…228
 深山 鏡子…230
 瑞田 任…231

象を抱いた少年
 還暦
 沈黙の唇
 桜花
 娘に
 泪
 あたたかい掌
 ストーン・サークル
 新春
 ホルスタイン
 八ヶ岳幻想
 木下閣
 羽布団
 一和一如の境
 冬の華
 酒
 眩しい時は二度とはこない
 空腹
 テネシーワルツ
 あく

水野 麻子…232
 水野 正巳…234
 宮崎 正孝…236
 宮田 恭子…237
 宮田久美子…238
 宮田 滋子…239
 武藤 重勝…239
 紫 圭子…240
 矢野 克子…243
 安森ソノ子…243
 柳 裕…244
 山内 透…245
 山口 賢…246
 山崎 央…247
 山崎 昇…248
 山下 延夫…249
 山田 寂雀…250
 山田 隆昭…251
 山田 ネミ…252
 山田茂里夫…253

女的美徳
 書けない
 寧日
 春日幻夢
 ……?
 謝肉祭
 病院の待合室で
 蘭州の雨
 福寿草
 続・おふくろ
 月
 商店街
 春
 血の中の風景
 茫洋
 除夜の鐘
 さぐる
 風
 夢
 水死郷

山土井芳子…254
 山野 一男…255
 山村 信男…255
 山本耕一路…257
 山本 敬子…258
 山本美代子…259
 大和 洋子…260
 弓削緋紗子…261
 結城 文…262
 雪原 立樹…263
 吉井富美江…264
 吉田 博哉…265
 吉村 晶子…266
 吉本与梨子…267
 和座 寛次…268
 若林のぼる…269
 若林 光江…269
 我妻 信夫…270
 渡辺 正八…271
 渡辺 宗子…272

風立つ日に
 あなたと私の穴について
 ジュラの海
 —資料—
 年刊現代詩集'77～'81(下)への参加者名
 個人詩集紹介
 △あとかき▽

渡辺 洋…273
 渡辺真理子…274
 義根 勲…276

作

品

例言

一、本詩集は全国各地の同人誌・詩誌・文芸誌の支持と協力のもとに完成された各地の代表詩人によるアンソロジーで、掲載作品は一九八一年七月から一九八一年十二月末日までに制作されたものです。

一、寄せられた一〇〇〇余篇の中から二五九篇を選んで集録しました。作品は原則として作者名（筆名）のものは筆名）の五十音順。（ ）は作者在住の都道府県。末尾の太字は所属団体、所属同人誌名です。

一、同人誌・詩誌・文芸誌の主宰者による推薦作品は原則としてすべて掲載されております。

一、第四回年刊現代詩集新人賞は本詩集及び82年版下半期、の中から選出されます。発表は一九八三年三月上旬。本人通知、主要新聞紙上及びジャーナル年刊現代詩集等。（入選・賞状、記念楯及び賞金総額二拾万円 佳作・賞状及び記念楯）

野辺で

安芸信広（広島）

ただひとりでみちをあるいていると

二人であるいていくときよりも

余分によいものをみつけるようにかんずる

水辺のあしのはずれがなんともわびしく

ここちよくきこえる

◇

本心なにをねがっているのか

わからないことがある

つきあかりの晩

せせらぎのおとだけがたかい

◇

一心にはしつてみた

わき目もふらずはしつてみた

そして草の上にすわると

いのちと人生とがいつそういとおしく

しみじみと心にしみるものをかんずる

◇

林をぬけ林をぬけずんば歩いていくと

おもいがけずひろやかなところに出て

くずの花などがさいいていたりする

わたしはそのせけんばなれしたけしきが

なんともいえずすきだ

◇

―わがひとりごち―

おとめごよなれは知らむか

むなしきこの世のなりわいは

すべてこれ空をいく雲の如し

われ一人

ただ一人

水辺を歩みて

石一つひろいつ

石 火

阿 木 龍 一（埼玉）

子供たちの遊び場所になっている
小さな台地は

二週間に一度 激しく燃えた
炎が渦巻くそばで

一人の男が忙しく働いていた

子供たちは遊びの手を休め

遠くから 時折それを見た

影絵のような男の姿が

火炎の縁でゆらめいているのだった

数日後の台地では

男の汗と火傷の水腫と引替えに

灰銀色のコークスが得られた

コークスは住宅の家々に分配され

煮炊の燃料となり

暖をとるための燃料となった

家々の七輪の中で

男の結晶は燃え上った

日本が高度成長を歩みだそうとする頃

いつしか台地は燃えなくなり

男の姿も見えなくなった

家庭で使用する燃料も

気体燃料へと置き変わった

その台地には

火を見続けた男の目が

見えなくなったという噂だけが残った

一人の男のうめきのような多孔質のコークスを

私が再び見たのは

世界でも名高い製鉄会社の中だった

子供達の瞳の中で燃えていた化石資源は

鉄の還元剤として使用されていたのだ

地球の億万年をかけた組織が

巨大な経済の一部分であることが不思議だった

十数年を経て訪れた台地には

ささやかな家が

軒を連ねて建てられていた

住む人達が男のことを知るはずもなく

男が使っていたスコップの先端で

黒い煙をあげていた石火の名残りが

あるはずもなかった

石油に頼りきる日本経済の中で

私は原子力の仕事で

生計をたてている

火炎の階段を転がっていった一人の男が

私の重要書類の間を彷徨っているのがわかる

日本詩人クラブ・芸象文学会

青 空

阿 部 富美子（群馬）

青空には澄んだ眼がある

真実を話す口がある

手が 足が

愛に向かつて

優美な姿態を くりひろげている

そう すばらしい

人格を持っているのだ

ロマンチズムの果ては

恋びとを求めるように

決まって青空に向かう

そこには

今まで得難かったものが

全部揃えられて

わたしを待っているから

☆

青空は他の誰のものでもない

青空は

その人自身を写している
青い鏡なのだから

樹氷

阿部 栄子（山形）

それ故 青空と人とは
見えない糸で
幾重にも つながれている筈だ

天国へ行くと言うのは
青空の鏡に写った
その人自身の分身に導かれて
一つになることだ

わたしは思う
自分自身が写されている
その鏡を美しく磨き出すことが
人生なのだと

日本現代詩人会・龍

陰ぐち 告げ口
ぺたぺたくつついて さしさわり
きが重い

風と雪と霧とも付き合って
歯を食いしばる

今に見ている 見ていると
つぶやいていたら
樹氷になった

樹氷

樹氷群
いろんな形